

# 小児科だより vol.99

## 『療育』について考える

2023.12.2 発行

こんにちは。今年も残すところ、あとひと月となりました。12月は何かと忙しく過ごされる方も多いと思いますが、クリスマスや忘年会などのイベントを楽しむためにも、風邪などひかないように、手洗いなど感染対策や防寒対策に努めましょう。



さて今月の小児科だよりは、『療育』についてです。発達障がいの子どもに対して、よく『早期発見・早期療育』が大事だといわれます。『療育』というのは特殊な言葉で、療育をどうとらえるかによって、早期療育の意味も変わってきます。今回は、どのような療育が適切なのかについて改めて考えてみたいと思います。

日本では、『肢体不自由児教育の父』といわれる高木憲次医師が療育の源流をつくったとされています。高木先生は、『医療、訓練、教育など現代の科学を総動員して障害をできるだけ克服し、その子どもがもつ発達能力をできるだけ有効に育て上げ、自立に向かって育成すること』と療育を定義されました。その後も様々な方々の研究や実践を通じて療育は発展してきました。現在では、療育とは『治療的な視点を持ちながら教育をしていくこと』を総合的にさす言葉と考えられています。

高木先生の言葉に『障害をできるだけ克服』という一文があります。これを発達障がいには当てはめて考えると、対人関係の困難や不注意といった特性によって起きる問題を、どれだけ減らせるのかということになりますが、そこには少し注意が必要です。発達障がいの子の場合、短期的に対人関係の困難が減ったとしても、長期的に見ると、より大きな困難があとになって出てくることもあります。目先の効果にこだわりすぎること、結果として子どもに無理をさせてしまうこともあります。そうならないように、子どもの気持ちを大切に、なにか対応をするときには、それが『子どもに合っているか』をいつも考えるようにしましょう。

いま、医療機関や教育機関などで、さまざまな療育が行われています。海外でエビデンスがあるとされている取り組みを導入しているところもあれば、独自のプログラムを組んでいるところもあります。具体的な内容を見ても、教科学習の補習を中心に行っているところ、遊んでリラックスする時間が多いところ、コミュニケーションの練習を積極的にやっているところなど、さまざまです。多種多様なものがあるので、悩むこともあるかと思いますが、『子どもがそこに行くのをどれだけ楽しみにしているか』をよく考え、大切にすることを勧めます。一人ひとりのお子さんがみんな違うように、だれにとっても良いとか良くないではなく、合うか合わないかで選択していくのが重要と考えます。